

アレクサンドリアのクレメンスにおける 「訓導者」(paidagogos)の意義⁽¹⁾

秋山 学

I 序

ギリシア教父アレクサンドリアのクレメンス (A.D.150-215) は、主要著作として『プロトレプティコス』『バイダゴゴス』『ストロマテイス』の三作品を残している。これら三著作が純然たる三部作を構成するのかどうかについては古来説が分かれており、前一著作が段階を成すのは確実としても、元来第三段階を成すはずであった作品が現存していないという説が有力である。その場合『ストロマテ

イス』が三部作の第三段階を形成する作品ではなくなる。ただその『ストロマテイス』第七巻で、クレメンス自身が「異邦の者から信仰への転回は救いの第一の変容であり、信仰から覚知への転回は第二の変容である」(Str. VII.10. 57A)と述べている。ここで「異邦の者から信仰への転回」とは『プロトレプティコス』の目指すものであり、「信仰から覚知への転回」とは『ストロマテイス』の内容であると考えて差し支えない⁽²⁾。すると『バイダゴゴス』の執筆意図とはいかなるものであったのだろうか。

本稿は、クレメンスの描く「訓導者」paidagogosとい⁽³⁾

う存在そのものに光を当てること、著作としての『パイダゴゴス』の位置づけを明らかにすることを目的とするものである。

II 「勸告者」(protreptikos)

「訓導者」(paidagogos) 「師」(didaskalos)

『パイダゴゴス』の執筆意図は、著作冒頭よりほぼ明らかにされている。すなわちクレメンスは「子たちよ、真理の礎は既に、われわれ自身によって固められている。それは、偉大なる神の聖なる神殿の基としての、砕かれることのない覚知 (Gnosis) の礎であり、麗しき訓戒、ロゴスに適う従順を通じての永遠の生命 (zoe aidios) への欲求であって、知の場に据えられている」(Paed. I.1.1) という序文からこの作品を起こしているのである。ここから『パイダゴゴス』は、すでに信仰という「真理の礎」に立った者を対象に記されていると推測される。このことは、さらに続く箇所からも明らかとなる。以下、可能な限り原文テキストに従って考察をおこなうため、やや長めに訳文を提示してゆくことにする⁽⁴⁾。

「ロゴスは、次の三つの事柄をめぐって人間に関わる。それは倫理、行為、情念 (pathe) である。まず勸告者として、ロゴスは人の倫理を司る。つまり敬神の念 (theosebeia) の導き手として、さながら龍骨のごとく信仰の建設のために措定される。その上に立ってわれわれは大いに喜び、救いを目に古の思いなしを破棄して若返り、へ神はイストラエルに対し、心の直き人に対して何と善き方であることか」(詩七二一)と唱う預言に声を合わせる。次にロゴスはあらゆる行為に対し、提言者としてこれを監督する。さらに情念に対しては、慰め主としてこれを癒す。これらすべてにおいて、そこに関わるのは一にして同じロゴスであり、このロゴスが、生まれついた世の習性から人を引き離し、神への信仰の類まれなる救いに向け、訓導者として関わる (paidagogen) のである。さて、天上的な導者であるこのロゴスは、救いに向けて人を招く際、「勸告的」(protreptikos) である (部分から全体を名付けるなら「奨励的」(parormetikos) ロゴスというのが本来的である。なぜなら「勸告的」というのはあらゆる敬神の念 theosebeia に共通で、現在のまた来たるべき生命の衝動を、生まれを同じくする理性に植えつけるものであるから)。し

かるにこの両者とも、治癒を果たす (therapeutikos) と同時に示唆を与える (hypothetikos) ものであり、己がものに自ら随き従い、勧告を受けた者を励まし、主眼としては、われわれの内なる情念の癒しを約束するものである。

しかるにわれわれにあっては、この存在に対する適切な呼び名として、独自の名「訓導者」(paidagogos) をもって呼ぼう。この方は先立つ方であって (praktikos)、経過を吟味する方 (methodikos) ではない。またその目的は靈魂をより善なるものにするのであり、教義の賦与 (didaskain) ではなく、思慮ある生へと導くことを務めとし、学識に富んだ生を歩ませることを目指すものではない」(Paed. I. 1.1-1.3)。

いま引いた末尾の一節に現れる「経過を吟味」し、「教義の賦与」をおこない、さらに「学識に富んだ生を歩ませることを目指す」存在は、続いて次のように「師」(didaskalos) という名を持つことが明らかにされる。「とはいうものの、このロゴスは同時にまた教えの師たる存在でもある (didaskalikos)。もっとも現段階ではそう受け取ることはしない。というのも「師」たる存在は教義に関わる際、それを明らかにし不明を取り除くことを務めとするが、訓

導者は実践に携わる者であり、まず倫理観の確立を勧告し、必要な事ごの実現に向けて招き、濁りのない助言を伝え、以前迷いの境地にあった者の像を後の者たちに示すという役割を果たすからである」(Paed. I. 1.2.1)。さらにこのことは、第一巻第一章の末尾で次のように明確に表現される。「すべてにおいて人間愛に満ちたロゴスは、われわれに対し、救いの梯子、力ある教えにふさわしい階段を究めさせようと刻苦し、麗しき経倫を用いて、まず勧告し (protrepon)、しかるのち訓導し (paidagogon)、最後に教えを授ける (ekdidaskon) のである」(Paed. I. 1.3.3)。

したがって、クレメンスが少なくとも『バイダゴゴス』の執筆時点では、「勧告者」(protreptikos)「訓導者」(paidagogos)「師」(didaskalos) という三つの階梯を想定していたということは明らかであろう。このプランは、『バイダゴゴス』第三巻の終章においても保持されている。「多くの事柄のうち……たとえばこのような事柄を、かの訓導者は神の書より引いて説明し、自らの子どもたちに提示している。彼はそれらを通じて、言わば悪を根絶し、不正を取り除いているのである。しかるに、特別な人々に向けられた勧告も数多く聖なる書に書き込まれている。それ

は長老、司教あるいは助祭、また寡婦たちに宛てられたもので、これらに關しては別に述べる機会もあるう。ただ多くは比喩的な表現を通して、また譬えを通して語られることで、それを讀む人々に益をもたらさう。〈だが〉、訓導者は語る。〈これらについてなお教えを受けることはわたしの務めではない〉。われわれに必要なのは、その人に向かつてわれわれが歩みを進めるべき師、かの聖なる言葉 (logoi) の解説のための師 (didaskalos) なのである。わたしは教えを授けることを止め、あなた方は師から聞くべき時が来た。この師は麗しき導き (agoge) によって育まれたあなた方を引き取り、(聖書の) 言葉 (logia) を教授してくれるだろう (ekdidaxetai)。そのための学舎 (didaskaleion) とは、かの教会 (ekklēsia) であり、そのための唯一の「師」(didaskalos) とは、かの花婿なのである」(Paed. III. 12.97.1-98.1)。

そして『パイダゴゴス』全編の末尾には、おそらくクレメンス自身の作であろう「ロゴス讃歌」が付されているが、それに先立ち彼はこう述べている。「この訓導者なる方は、われわれを自ら教会 (ekklēsia) へと導き、師たる役割を帯びすべてを知悉するロゴスに託された。それゆえ

われわれはここに到り、正しき感謝に適った献げ物として、麗しき訓導の讃歌を主に贈るべきであろう」(Paed. III. 12.98.1)。

以上から、「訓導者」は「勸告者」が信仰へと招き入れた人々に接し、これを最終的に「花婿」たる「師」に引き渡すまでの道程を担う存在であるということが理解される。つまりその際に対象となるのは、すでに洗礼を受けて「信徒」となり、「真理の礎」を固めた者たちではあるが、まだ聖書に収められた数々の難解な表現を「師」の許で解釈できるまでには至っていない存在である。もっとも、言うまでもなくこの「訓導者」と「師」とは、この『パイダゴゴス』末尾において一致する。「訓導者よ、あなたの子らに對して恵み深くあれ。父にしてイスラエルの御者なる方、子にして父、一にして両者なる主よ。われら、あなたの掟に隨う者たちに、像という類似性(創世一26)を満たすことを、そして裁き手でありながら辛辣でない善き神を、力の限り感じ取ることを叶えさせたまえ。そしてあなたの平和のうちに暮らし、あなたの町へと移住し、罪の波にも揺らぐことなく航行し、聖なる靈、語りがたき知恵とともに安らかに運ばれることを、自らすべてにおいて許したまえ。

夜も日中も、一日中、感謝の讃歌を唯一なる父にして子、子にして父、訓導者にして師なる子に、聖霊とともに献げるわれらを通して」(Paed. III. 12.101.1-101.2)。

Ⅲ 「訓導者」をめぐるパウロとクレメンス

さて「訓導者」と訳した *paidagogos* という語は、すでにパウロが『ガラテア書』の中で用いている。「信仰が到来する以前には、われわれは律法の下で監視され、来たるべき信仰が啓示されるまで閉じ込められていた。わたしたちが信仰によって義とされるために、律法がわれわれをキリストへと導く訓導者となっていたのである。しかし信仰が到来したため、もはやわれわれはこの訓導者の下にはいない」(ガラ三23—25)。

この聖書箇所に関して、クレメンスは次のように注解を加えている。「へわれわれはもはや、あの律法の下にはいない」ということを今耳にしなかつただろうか？ この律法とは恐れを伴うものであったが、ロゴスの下では選択 (*praisis*) のための訓導者だということを。続いて使徒は、あらゆる不公平を脱した次のような見解を付け加えて

いる。(あなた方はみな、信仰によりキリスト・イエスのうちにあって神の子らなのだ。あなた方はキリストへと洗礼を受けたのだから、キリストを身にまとい持っている。ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなた方はみな、キリスト・イエスにおいて一つなのだ) (ガラ三26—28) (Paed. I. 6.31.1)。

上の「選択」という観点は、『バイダゴゴス』の別の箇所にも現れる。「われわれとしては、この最善なる生の導き手なる方に愛をもって返礼すること、この方の選択 (*praisis*) による掟に従って生きることがふさわしい。すなわち勧められたことを全うしたり禁じられたことを避けたりするだけでなく、種々の範型のうちあるものは退け、あるものについては力の限り模倣しつつ、訓導者の業に倣ってこれを全うするのである。つまりまさしく(神の)像としてまた似姿として」(創世一26) 全うするためである」(Paed. I. 3.9.1)。

ここから、律法すなわち旧約という時期の意味づけに関するクレメンスの見解を読み取ることができる。すなわちクレメンスによれば、「旧約↓新約」という時間的先後関係だけでは、パウロが述べるように「訓導者↓キリスト」

という一方通行的な関係に置かれるよりはかかない。だが到来したロゴス・キリストの下での「訓導者」たる「律法」の存在意義は、われわれの「選択」のための鑑識眼を陶冶する役割を帯びるのである。

クレメンスによる旧約期に対するこの理解は、『ストロマテイス』において彼が見せるギリシア哲学への高い評価とも通底する。クレメンスは、ギリシア哲学を「旧約」と並ぶ位置に置き、ヘブライ・ユダヤ以外の文化圏にも福音が浸透する可能性を拓く。⁽⁵⁾「主の到来以前には、ギリシア人にとって、哲学は正義に導くものとして必須であった。しかるに今や敬神の念にとって有益なものとなった。言わば、実証を通して信仰を享受しようとする人々にとっての予備教育となったのである。たとえそれがギリシアのものであれ、キリスト教的なものであれ、麗しきものを神慮に結び付けるならへあなたの足はつまずかない」(箴言三23)。というのも、すべて麗しきものの原因は神であり、それは旧約および新約のような第一義的なものに関してばかりでなく、哲学のような第二義的なものについても当てはまるからである。愛智はおそらく、主がギリシア人をも招く以前は、第一義的なものとしてギリシア人に与えられていた。

というのも、律法がヘブライ人をキリストに向けて導いたと同様に、愛智はギリシアを教育したからである。つまり、愛智はキリストによって完成されるべき者を、前もって導き、前もって準備したのである」(Str. I. 5.28.1-3)。

こうして、クレメンスがパウロの「旧約・新約」二項対比的理解から一步進み、そこに「選択」という中項を加え、あるいはギリシア哲学という第三の要因を加味したことは、救済史理解におけるロゴス性を高め、キリスト教神学の視野を切り拓くことになったと言えよう。またクレメンスは、教父たちの中で随一、古典諸作品からの引用にあふれかえるその文体をもって、稀有な存在となっている。このことも、彼がパウロの「旧約・新約」二項対比的理解から一步進んでいることを立証するものであろう。これら諸要因の根幹に存在する者こそ「訓導者」なのである。

IV 洗礼に関するクレメンスの理解

さて「訓導者」が預かる者たちとは、すでに洗礼を受けて信の途に就いた者であるという点は確認したが、その端緒となる「洗礼」について、クレメンスの見解を彼の原文

に沿って確認しておこう。「無経験は経験によって解消し、前人未到は歩みによって切り開かれるように、照らしよって闇は滅却されるのが必然である。無知こそその闇であり、この無知によってわれわれは過ちに陥り、真理に関して明確な視覚を持たずにいる。覚知こそこの場合の照らしであり、これは無知を滅却し視力を内在させる (enthesis)。だがそれに留まらず、より悪しきものを切り捨てることは、より善きものを明るみに出すことである。なぜなら無知がまずい仕方で呪縛している事柄は、認識 (epignosis) によって見事に解決されるからである。しかるにこの呪縛は、人間の側からは信仰により、また神的なあり方としては恩寵 (charis) によって、速やかに除去される。その際、唯一なる癒しの妙薬、すなわちロゴスによる洗礼によって、過ちは拭い去られるのである」(Paed. I. 6:29, 45)。ここでは「ロゴスによる洗礼」こそ「癒しの妙薬」であるという表現に注目しておきたい。

クレメンスは続ける。「かくしてわれわれは、すべての過ちを洗い浄め、その直後から悪とは無縁である。この照明の第一の賜物は、われわれがおり方 (tropos) の点で、浄めを受ける以前と同じ存在ではない、ということである。

覚知が照明とともに与えられ、理性 (nous) を照らすということは、弟子となるや直ちに、学びの足りぬ身ではあっても耳にすることであり、学びが加わる以前の段階で起る。それが何時なのかについて語ることはできない。というのも教理教育 (katechesis) は信仰へと巡り導く (peribatein) が、信仰は洗礼とともに聖なる霊を通じて教え授けられる (pαιδεύεται) からである。ただ信仰だけが、人間性に対する唯一の普遍的救いであり、かつ義しく人間愛に満ちた神の平等性 (isotes) と通交性 (koinonia) は、万人に対して同一のものである」(Paed. I. 6:30, 1-2)。これに続いて、先に引いた『ガラテア書』をめぐるクレメンスの理解が提示される。

上の一節では、「学び」が加わる以前の段階で、われわれが洗礼による浄めを体験するとともに信仰が授けられ、それは「照明」として欠けるところのない賜物であるという見解が表明されていた。この「学び」こそ訓導者が管轄すべき任務なのであるが、この『パイダゴゴス』第一巻第六章では、冒頭より「洗礼を受けること」それはすなわち「完全性の獲得」であるという彼の洗礼観が詳しく提示される。「われわれが「子供」あるいは「嬰兒」と呼ばれ

るにしても、覚知に到ったと尊大に誇示する者どもが侮蔑的に言っているような意味で、われわれの学びが子どもじみて軽蔑に値するということは決してない。実にわれわれは、再生を遂げて (anagenēhentes) 直ちに、そのために尽力してきた完全性 (to teleion) を獲得したからである。われわれは照らしを受けた (ephotisthmen)。これこそ「神を認識する」(epignōnai) ということである。完全性を知悉した者が不完全であるわけではない。もっともわたしは「神を知り抜いた」と認めているとは受け取らないで欲しい。御言葉に対しては、こう述べるのが相応しいと思われるからである。しかもその方は「自由である」(ヨハネ 8:35-36)。実に、主が洗礼を受けられたとき、直ちに天から愛の神が証言する声が響きわたった。へあなたはわたしの愛する子、わたしは今日あなたを生んだ」(マタイ 3:17)。知恵者を自称する者たちに問いたい。「今日再生を遂げたキリストはすでに完全であるか、それとも一馬鹿げた話だが、不完全であるか?」と。もし不完全であれば、主はさらに何か学ばねばならないはずである。しかし主が、さらに何か一つでも学ぶ必要があるはずはない。彼は神なのだから。御言葉よりも誰か偉大な者、唯一の師にとって

の師がありえようか。したがってたとえ反対論者であろうとも、完全なる父から完全なるあり方で生まれたロゴスが、経倫 (oikonomia) の先取りとして完全な形で再生を遂げたということを認めざるを得ないのではなからうか。だがもし完全なのであれば、何ゆえに完全なる方が洗礼を受けたのであろうか。聖書に曰く、人間にとっての約束を満たす必要があったからである(マタイ 3:15)。まったくその通りだと言いたい。ではイエスは、ヨハネから洗礼を受けると同時に完全なる者となったのであろうか。それは明らかである。ではイエスにとって、さらに学んだことはなかったのだろうか。なかったのである。ではただ浄め (loutron) のみによって完全なものとなされ、霊の降臨によって聖化されたのであろうか。そのとおりである」(Paed. I. 6.25.1-3)。

このように、クレメンスの洗礼観の根拠となっているのは、われわれの洗礼をキリストの受洗から類比的に理解するクレメンス独自の神学である。彼はさらに、われわれが受ける洗礼の意味をキリストの受洗の意味と重ねてゆく。「これと同一の事柄がわれわれにも生ずる。主はわれわれにとっての規範 (typon graphē) となったのである。われ

われは洗礼を受けることによって照らされ、照らされることによつて子とされ、子とされることによつて完全なものとされ、完全なものとされることによつて不死なるものとされる。曰く「わたしは言った。「あなたがたは神々であり、すべて至高なる方の子らである」(詩八二・6)。この業については、様々な名で呼ばれている。すなわち「賜物」(charisma)、「照明」(photisma)、「完成」(teleion)、「そして「浄め」(loutron) などである。「浄め」と言われるのは、それによつてわれわれが罪を洗い浄めるからであり、「賜物」とされるのは、これによつて罪に対する罰が取り除かれるからである。「照明」と言われるのは、これを通じてあの聖なる救いの光が観照される (epoptautai)、すなわち神聖なるものを直視することができるところである。そして「完成」とされるのは、これに欠けたるところがないからだと言える。というのも神を知った者にとつて、さらに何が欠けているか。未だに満たされていない賜物を「神のもの」だとするのは、甚だ愚かなことである。明らかに神は完全な方であるがゆえに、完全な形で賜物を下さる。神が命ずると同時に万物が成ると同様、神が望んだだけで、賜物の賦与には恩寵の充滿が伴う。時間的に来た

るべきものは、意向の力によつて先取りされる (prolambanetai) からである。さらに、悪から解放されることは救いの始まりである」(Paed. I. 6.26.1-2)。

以上、クレメンスは「洗礼」の意味づけについて、パウロをはじめ一般的な理解がこれを「キリストの死」に結びつけるのに対して、むしろこれを「キリストの洗礼」とも類比関係に置いていることに注目すべきであろう。

V パトスとしての「受難」と「情念」

さて「訓導者」が携わる大きな務めの一つは「情動の癒し」である。『バイダゴゴス』冒頭の第一巻一章、本稿第二章に引いた数節に次いでこう語られる。「さて、情念の癒しはこれに続く。訓導者は、像による勧告を用いながら靈魂を強め、いわば緩和剤を用いるような仕方で、人間愛に満ちた助言でもって、疲れた者を、真理を全的に把握する知識 (gnosis) に向けて導く。しかるに健康と知識は等しくはない。後者は学びの結果であり、前者は癒しの実りである。つまり病める者は、完全に健康を回復しない限り、幾ばくかでも教説を学ぶことはできない。というのも、

学びつつある者と疲れた者とに対して、常に同じように各々の教えが語られるということはない。むしろ前者に対しては知識に向け、後者に対しては癒しに向けて講ぜられるのである。すなわち、肉体を病める者が医者が必要とするのと同じように、靈魂の弱い者は訓導者を要するのである。

つまり、われわれの情念が癒されたのち、師導者の許に導かれ、知識を得るための適性陶冶に向けて、靈魂を浄らかなものに整えるのである。それはロゴスの啓示を受容する能力を備えるためである」(Paed. I. 1.3.1-3)。

上で「情念」と訳した原語は *pathos* であるが、言うまでもなくこの語彙はイエスの「受難」を表す語としても一般的である。人間の「情念」とイエスの「受難」とは接点を持たないようにも思われるが、クレメンスの記述からこの点に関して示唆を得ることはできるであろうか。彼のテキストに聴従しよう。「さて、あなた方子供たちよ、われらが訓導者はその父である神に似ている。訓導者はまたその方の子でもあり、罪なく非難される点もなく、靈魂においては不受動 (*apatheis*) で、人間の姿を取った汚れなき神であり、父の意向の僕、神なるロゴス、父のうちにあり、父の右の座にある方、その姿の上でも神なる方である。こ

の方はわれわれにとって染みなき像であり、全力を挙げてこの方に靈魂を似せるべく努めねばならない。ただこの方は人間的な情動 (*pathos*) からはまったく解放されているのに対して、われわれは力の限り、できるだけ罪を犯すことのないように試みよう。というのも、まずもって情動と疾病からの解放ほど急を要するものではなく、次に勧められるのは罪の習慣への陥りやすさを阻止することである。実に、もっとも優れているのはいかなるあり方においてもまったく罪を犯さないことであるが、これは言わば神の業である。思念の上でいかなる不正にも接しないのが次善のあり方であるが、これは知者に相応しき業である。第三は望まぬ不正の多くに陥らないことであり、これこそまさしく訓導を受けた者に適った固有の業である。だが罪に長々と関わることはせず、これは最後に取って置くとしよう。むしろ回心に招かれている者たちには、闘うことも救いの業である」(Paed. I. 2.4.1-3)。

このようにクレメンスは、以降の東方教父たちが取る方向性と同一ように「情念からの解放」すなわち「不受動」*apatheia* の境地を強調する。この境地がイエスの「受難」と関連しうるということは、『パイダゴゴス』第二巻第

八章「王冠や香油は用いるべきであるか」という一節における聖書の比喩的解釈にかがわれるように思われる。以下クレメンスの原文を辿ってみよう。

「われわれにとって王冠や香油を用いることは必要ではない。というのもこれらは快樂や放縱へと駆り立てるものであり、とりわけ夜が近づくともそれが甚だしいからである。ある婦人が「香油の壺」を聖なる晩餐の場に携えて来て、主の御足をぬぐい、主に喜ばれたことが伝えられている（ルカ七37以下）。またいにしえのユダヤ人の王たちが、金や高価な宝玉で身を飾ったことも知られている（サム下二30、歴代上二〇2）。だがかの婦人はまだロゴスに与っていなかった（というのも罪人であったから）、自分の許にある中で最も素晴らしいと考えたもの、すなわち香油をもって、主に崇敬を表したのである。さらに彼女は、体の飾りである自らの髪でもって香油の滴りをぬぐい、痛悔の涙を主に注ぎかけたのだ。それゆえ「彼女の罪は許された」（ルカ七47）。

これはまた主の教えと受難 (*pathos*) の象徴ともなりうる。というのもまず、芳しき香油でぬぐわれた御足は、神の教えが、地の果てまで栄光とともに及ぶということを比

喩的に語っているからである。「なぜならその響きは地の果てにまで轟く」（詩篇一八5）。この解釈があまり一般的でないと思われるなら、主の御足とは、芳香の預言という香油を受け、聖霊の塗布に与った使徒たちである。いかにも、全世界を巡り福音を告げ知らせる使徒たちは「主の御足」という比喩的表現に相応しく、彼らについては『詩篇』を通して聖霊がこう預言している。「そこへ赴き跪こう、主の御足が立つところへ」（詩篇一三一7）、すなわちこれは「主の御足」である使徒たちが赴いたところ、との意であり、彼らを通じて地の果てにまで教えが告げ知らされるのである。一方涙とは痛悔の意味であり、解かれた髪とは、装飾趣味からの解放、主による福音告知に伴う艱難を忍耐のうちに耐えるべきこと、旧約の虚栄が新約の信仰によって刷新されることを伝えている。だがそればかりでなく、この場面に思いを致す者には、神秘的なかたちで主の受難 (*pathos*) も表されている。すなわち主ご自身はブドウ酒であり、そこからわれわれの上に憐れみが注がれる。一方香油とは偽りのブドウ酒であり、これは裏切り者のユダであった、香油でもって御足をぬぐわれた主はこの世での生から解放された。というのも死者たちは香油漬けにされる

からである。しかるに悔い改めを果たしたわれわれ罪人たちは涙であり、われわれの過ちを許して下さった主ご自身に信を置いた者 (pepisteuktotes) である。また解かれた髪とは、見捨て置かれて悔いるイェルサレムであり、彼女を通して預言の哀歌が歌われる」(Paed. II. 8.61.1-62.3)。

先にクレメンスは、洗礼とは信仰を授与し、完全性を得させる恵みであるという理解を示していた。上の箇所では、信仰に入ったわれわれと受難から解放されたイエスが並置されている。もっともクレメンスは、キリストが「人間的な情動からはまったく解放されている」のに対し、「われわれは力の限り、できるだけ罪を犯すことのないように試み」る必要がある、その務めをこそ訓導者の任務として考えていた。その一方で彼は、洗礼により「われわれは、再生を遂げて (anagenēntes) 直ちに、そのために尽力してきた完全性 (to teleion) を獲得した。われれは照らしを受けた (ephotismen) のである。これこそ〈神を認識する〉 (epignōn) といふことである」(Paed. I. 6.25.1) と理解していた。ここで「再生」とは「復活」と同義である。従って洗礼以後の信徒の生は、訓導者による不受動 *apatheia* を実現する生として規定される。そ

れはまさしく「再生」の生、「復活後」の生である。つまりキリストが受難 *pathos* を終え、復活体として現存するのであれば、われわれが洗礼を経て彼に倣うとき、不受動に徹し、復活体を実現し続けることが務めとなる。

さらにクレメンスは、この「再生」が「神を認識する」(epignōn) ということに他ならないと考えている。クレメンスによる「認識」(epignōsis) 理解の根底には、新約聖書『ルカ福音書』末尾の「エマオへの道」(ルカ二十四 13-35) における、弟子たちが復活後のイエスを認識する場面が存在するという⁽⁶⁾ことに關して、筆者は既にいくつかの論文で公にした。ここにその概要を記すことにしよう。『ルカ福音書』(二四 30-31) のテキストは「イエスがパンを裂くと、二人の両眼が開け、彼らはイエスを認識した (epēgnōsan)」。すると (kai) イエスは二人から見えなくなった」となっている。この箇所は、人間の「認識」epignōsis 活動が、復活のキリストの内在に支えられてはじめて成立するということを端的に語ったものであるが、先のクレメンスの洗礼観をここに重ねて考えることができよう。すなわち洗礼による再生とは、生命活動そのものを復活のキリストの生に重ねることに他ならない。この点で受

洗とは、イエスの受洗のかたどりにとどまらず、「復活のキリストの内在」という意味で、先の「エマオ」の箇所と等しい次元を指し示すことになるのである。

VI 「訓導者」と異教文化

これまでの考察により、クレメンス自身が述べるように、訓導者の務めが「選択」のための確かな指針を授けることにあるとは言え、それが究極的に復活のキリストの生への参与を示すものであることが明らかになった。ここでもう一度クレメンスが語る訓導者の役割に立ち戻ってみよう。本稿冒頭に引いた一節では、「この方は先立つ方であって」、「靈魂をより善なるものにする事」を目的とし、「思慮ある生へと導くこと」を務めとする、と語られていた。この箇所、および本稿でも先に引いた『ストロマテイス』のギリシア哲学称揚の一節や、「旧約」をロゴスの下の訓導者の役割として理解した箇所などを考え合わせるならば、訓導者は洗礼以後の信徒の訓導を務めるとは言え、旧約や哲学、そして「靈魂をより善なるものにする」もの全般を援用する、と考えてよいだろう。ではこの訓導者を異教

文化世界に置きなおすことはできるだろうか。

クレメンスが、その著作全般において、ギリシア古典文学の諸作品、特に哲学者や詩人から多く引用することはすでに指摘した。これは『パイダゴゴス』にあっても当てはまる。たとえば古典ギリシアにおける「訓導者」の例を引いた次のような箇所が挙げられるだろう。「アキレウスの訓導者はフォイニクスであり、クロイソスの子供たちのそれはアドラストス、アレクサンドロスのレオニダス、フィリップスのノウシトオスであったと伝えられている。だがフォイニクスは女狂いであったし、アドラストスは脱走者であり、レオニダスのかのマケドニア人（アレクサンドロス）の倨傲を制しえず、ノウシトオスもかのペッサ出身の男の泥酔を癒しえなかった。またアルキビアデスの好色をトラキアの人ゾピュロスは抑える力がなかったが、このゾピュロスは（買い取られた）解放奴隷であり、またテミストクレスの子供たちの訓導者は、軽薄な家僕のシキノスであった。彼は舞踏者であり、サテュロス踊りをしたことが伝わっている。またペルシア人の大王づきの「訓導者」と呼ばれる人々も忘れてはいない。彼らは、すべてのペルシア人たちの中からペルシア大王が特に四名と決め

て選出し、自らの子供たちに付けた人々であった。だがこの子供たちは彼らからだだ弓矢の術のみを学び、成人するや姉妹たち、母親たち、結婚した婦人たちや数限りない妾女たちと立ち交じり、その様はさながら野猪が共棲のために習練を積むかのようであったと言う。しかるにわれわれの訓導者とは、聖なる神イエスであり、全人間性を導くロゴスであり、人間愛に満ちた神ご自身が訓導者なのである」(Paed. I. 7.55.1)。

クレメンスの場合、『プロトレプティコス』は「異邦の者に対する回心」を勧める内容であったし、上に引いた一節も、ロゴス・キリストとの対比のうちに異邦の「訓導者」を否定的に引用した箇所である。しかしながら、他の教父たちに比して圧倒的に古典の引用が多いクレメンスであればこそ、古典に対する彼の該博な知識それ自体をもって、彼が古典文化そのものに「訓導」の意義を見出していたと考えることは可能であろう。この意味でクレメンスは、「ロゴス」への参与を基準としてイエス以前の人々にキリスト性を見出そうとするユスティノス (A.D. 100-165) と同一線上に立つ。つまりクレメンスもまた、ロゴス・訓導者を通じ、復活の光を通して異教文化に対峙した人であっ

た。

『ストロマテイス』第五巻では次のように語られている。「正しき者は、愛に満ちた発見を追い求めるであろう。そして努め励むうち、ついにその発見に到る。なぜなら主が「叩く者には開かれるであろう」、「求めよ、そうすればあなたに与えられるであろう」(マタイ七)と述べているからである。「天の」王国を略奪する「襲撃者ども」(マタイ十一-十二)は、論争の言葉ではなく、義しき生の継続と、止むことのない祈り(一テサロニケ五17)でもって昔の過ちによる汚点を拭い去り、「天国を」強奪すると言われるからである」(Str. V. 3.16.7)。

ここで強調されているのは「義しき生の継続」と「止むことのない祈り」である。おそらく後者が「師」たる存在の役割に属すとすれば、前者が「訓導者」の務めに関わるのであろう。異教文化の中に生きる際、「師」の司る学問性や「訓導者」の実践の場が限定される状況が大いに考えられる。その折には、両者の本質を立体的に己がうちに内在させることが必要であり、その場合訓導者からの教えは「義しき生の継続」ということに集約されると考えてよい(1)。
 だろう。

Ⅶ 結

本稿での考察により、クレメンスの描く「訓導者」とは、「勸告者」と「師」の間に介在し、ロゴスの下において、律法をはじめ旧約的な諸要因を選択 (*proairesis*) のための素材となす存在であることが明らかになった。彼が管轄するのは、すでに洗礼を受け「完全な者」とされた人々である。もっとも彼の任務は、義しき生の継続を説いて人々に情念からの解放 *apatheia* を実現させ、復活の生を歩ませるといふ重要なものである。またクレメンス自身が、復活の光を通して異教文化に対峙する稀有な教父として輝きを放っているのも、この「訓導者」という存在を立てたことに一因があった。このようなユニークな存在である「訓導者」を通して語られる『パイダゴゴス』とは、クレメンスのコルプスにあって中樞の位置づけを担う意義深い著作だといえよう。

注

- (1) 筆者は二〇〇三年十二月六日聖心女子大学にて行われた教父研究会の第一〇七回定例研究会において「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』研究」コルプスにおける位置づけをめぐって」と題して発表を行った。口頭発表の時期からほぼ一年が経過し、考えるテーマにも変遷があったため、発表内容は同題目にて別に公表し(筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究』文藝篇四六、一—二二頁、二〇〇四年)、新たな論考を寄稿することとし、編集部了解も得られた。
- (2) なお『ストロマテイス』篇に関して、「覚知者」をキーワードに読み解いた試みとして、「アレクサンドリアのクレメンスにおける「覚知者」(*gnostikos*)の本質」(東方キリスト教学学会誌『エイコーン』第二八号2/2、三四—五一頁、二〇〇三年)を参照。
- (3) 従来 *paidagogos* という語には「教育者」という訳語が当てられることが多かった。だがクレメンスのテキストからは、当時のアレクサンドリアに実在した養育係を想定させる訳語が望ましいという印象を得た。
- (4) クレメンスのテキストは、シュテーターリンによる GCS 版のほか、適宜の版をも参照する。
- (5) その試みとして拙著『教父と古典解釈』(創文社、二〇〇一

年)を参照。

(6) 前掲注(2)の拙稿、および注(4)の拙著を参照。

(7) 本稿では深く追究することができなかったが、「絶えざる祈り」を実践する必要性から見出された東方の伝統「イエスの祈り」に関しては次書を参照。Per-Olof Sjögren (ford. Verdes Sándor), *A Jézus-ima: A Szitu imádsága*, Budapest 2003.

※本稿は平成十五〜十七年度科学研究費補助金基盤研究C(2)

「東欧・スラブ諸国における西洋古典学の継承と展開」(課題番号 15520148)による研究成果の一部である。